

<b>課題名</b> 担い手の定着と経営改善への支援	人づくり	京都乙訓農業改良普及センター
<b>(1) 普及指導事項（評価対象）</b> 普及指導事項①：農福連携による経営改善（発展）に向けた支援	<b>(2) 普及指導対象</b> 農福連携により経営改善（発展）を目指す農業者6名程度	
<b>(3) 活動内容と成果</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>令和6年度に乙訓地域の福祉事業所に対してアンケートを実施し、農福連携に取り組む意欲のある事業所の掘り起こしを実施した。</li> <li>農福連携のさらなる推進に向け、令和7年3月に「地域とつながる！農福連携きょうとおとくに版事例集」をHPに掲載した。令和7年度は事例集を印刷製本し、農業者への農福連携の周知のため配布、活用している。</li> <li>令和7年12月11日（木）に京都乙訓地域の農業者、福祉事業所等を対象とした農福連携研修会を開催し、関係機関を含めて約50名が参加した。研修会では、農福連携の仕組みやメリットを理解することを目的に3つの講演と出荷調製の実演・相談マッチングのブースを設置。マッチングには農業者6名、福祉事業所7社が参加した。</li> <li>令和6年度からの2箇年で農業者から要望があった11作業について、ポイントを明示したマニュアルを利用者向けと支援者向けに作成した。また、福祉事業所への作業委託や障害者の受入れに向けてマニュアルを活用した農業者が7名、農福連携により経営改善につながった農業者は6名であった。</li> <li>農福連携に取り組んだ農業者からは、「栽培面積が拡大できた」「観光農園運営に注力できた」との意見が挙がった。</li> <li>菊芋入り小松菜ケーキや小松菜せんべいなどのコラボ企画商品も誕生した。</li> </ul>		
<b>(4) コメント</b>	<b>(5) 普及指導計画への反映状況、今後の活動等</b>	
<p>&lt;要約&gt;</p> <p>農福連携は農業者の人手不足解消と障がい者の就労機会創出を両立する重要な取組として高く評価でき、事例集やマニュアル整備、関係機関との連携により、実践しやすい環境づくりが進んでいる点も評価する。</p> <p>農福連携の導入により6名が経営改善を実感するなど成果も見られた一方で農福連携研修会の参加農家が少ない点が課題であり、参加を促す方法の検討に加え、説明を聞いた上で、農福連携を活用しない理由を分析し、今後の普及活動へ活用されることが求められる。</p> <p>また、成功事例だけでなく、農福連携マッチングをしたものの契約に至らなかった事例の共有が求められる。</p> <p>持続的推進のため、福祉機関との連携強化や経済的効果の明示も重要である。</p>	<p>農福連携研修会は農福連携の認知度向上のため、来年度も開催する予定です。多くの農業者に参加していただけるよう開催時期を工夫するとともに、生産部会や農業者組織へ広く周知することに加え、農福連携の活用により経営改善効果が見込まれる農業者には、個別に研修会参加の呼びかけを行うことで参加者を確保することを検討しています。</p> <p>今年度のマッチングに参加した農業者は、全員が委託契約に向けた検討を進めているところです。また、説明を聞いたことで新たにマッチングを希望する参加者もあり、関係機関が連携してフォローアップを行っているところです。</p> <p>なお、マッチングしたものの契約に至らなかった事例については、関係機関で情報共有を行い、農業者と福祉事業所双方のニーズにより適合したマッチングとなるよう取り組んでいます。</p> <p>現時点で当センターが把握している課題として、農家が福祉事業所に収穫物の選別や袋詰め作業を委託する際、収穫物の受</p>	

け渡しが行われていない点が挙げられます。このため、集荷団体が運営する収穫物の受け渡しを行うためのハブを設けることができないか検討します。これにより、農業者にとっては受け渡しから出荷までがスムーズにでき、福祉事業所にとっては複数の農業者の選別・袋詰作業を1つの事業所で受託できるようになるため、農家と福祉事業所間の連携がより合理的に推進され、経済的にも双方にメリットが生じると認識しています。